
アゲイン

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アゲイン

【NZコード】

N1023D

【作者名】

カト・ラス

【あらすじ】

末期の肺がんにおかされた主人公、三浦祐介は意氣消沈していた。医者からは入院を薦められていたが、妻との残り少ないと思われる日々と一緒に過ごしたいため、入院はしないでいた。そんな、主人を見て、妻、貴子は海外旅行を提案してきた。目的地は10年前に新婚旅行でいったアメリカであった。

楽しい旅行に向かって（前書き）

夫婦愛をテーマにアメリカ旅行を題材にして書いていきたいと思つてます。旅行ガイド的、要素もとりいれて描けたらとおもつてあります。

楽しい旅行に向かつて

私達夫婦は関西国際空港の北ウイング9番ゲートにいた。ここにいる理由はもちろん、海外旅行の為なのであるが……私の気分はとてもじやないが、海外旅行に行くという晴れやかな気分などではなかつた。

なぜなら、私は不治の病である末期の肺がん患者だからだ。

医者から死の宣告を受けたのは、ほんの数週間前の出来事であつた。いまだに医者が冷たくない放つた言葉が脳裡にやきついている。「残念ですが……末期の肺がんです。余命は長くもつて、半年かと」最初はただの風邪だと思つていたのに。体の調子が悪くなつたのが、死の宣告をうける三ヶ月前からだつた。その時の私は、偶に咳がでて、たんがよくからむといったものだつた。きっとタバコの吸いすぎだろう程度に思つていたが、現実は甘くなかった。症状が始まつたころに、病院に早くいついたらとか、いろいろ考える。しかし、何で私がこのような目に合わないといけないのだろう。他人に迷惑をかけずに、決して贅沢もせず、妻の為に早くマイホームを立ててやろうと必死に働いていたのに。今となつては、子供がいい事が救いだとも思う。私がいなくなつても、子供がいなかつたら妻も、次の結婚がし易いだろうと思うからだ。しかし、ほんとに辛い。体がしんどいワケではない。心が辛いのだ。

私の心の声が叫ぶ！ 死にたくない、死にたくない、死にたくない。いよ。

私の名前は三浦 祐介。歳は32で、妻、貴子とは結婚して、ちょうど10年目である。職業は地元の小さな信用金庫で働いている。現在は病氣治療のため休職扱いになつてている。

旅行の目的地はアメリカである。妻、貴子と新婚旅行に行つた思い出の場所。医者からは旅行などもつてのほか、すぐに入院して抗

がん剤で治療しなさいときつゝ言われたが、なにをいまさらと思つ。最初は入院して、治療に専念しようかと迷つたが止めた。どうせ、治療といつても、がん細胞を切除して直せるレベルでもないだろうし……それなら、あと数ヶ月、妻と少しでも一緒に過ごしたから。妻にその事をいつたら、初めは、涙をうかべて反対していたが、自分の思いをぶちまけたら、理解してくれた。そして、それなら旅行にでもいきましょうと提案してくれた。

「あなた、今まで働きづめだったでしょ。どつか行きましょうよ。楽しみましょ、何かの本で、笑つたり、楽しんだりしたら、ガン細胞の増殖がおさまったって聞いた事があるわよ！だから、これからは、笑つて生活しましょうよ。奇跡だつてあるわよ、きっと、きつとね」

「そうだ、妻の言つ通りだと思った。くよくよしてたつて良い事なんかないと思う。でも、やはり、ウキウキした気分にはなれなかつた。

旅行の段取りは全て妻がしてくれた。妻の話では、とんでもなく豪華なプランであった。

「贅沢にいきましょよ」

私達にお金の心配は無かつた。なぜなら、生命保険のリビングサービスという契約が適用されたからだ。すぐに保険会社からは私の銀行口座に5千万円という大金が振り込まれたからだ。いわゆる生存前給付金、私のように死の宣告を受けたものだけが得られる唯一の特権といったところだ。

「全部使うつもりで、旅行楽しみましょうね

愛する優しい妻は、そう言つてくれた。

「全部つて、ダメだよー。俺がいなくなつた後、おまえの生活のための金なんだぞ」

私が強く言つても、妻は笑顔でこう言つだけだった。

「私の事は心配しないでいいの。生活なんて、なんとかなるわよ！…だつて働いたらいだけでしょう。それに。私美人だから、すぐ

に金持ちの男性がすりよつてくるわよ

お世辞にも美人だとはいえない妻だが、性格はぴか一に明るく、そして優しい。私にはもつたない妻。

ああ、死にたくない。死にたくない。死にたくないよ！

出発ロビーにいる人々。私達のように、これから出発する者、日本旅行を楽しんで、これから帰国する外国人の人、それぞれが、いろんな思いで飛行機の出発を待っているロビー、出発30分前になつて、ようやく、私の心が晴れた。

よし、思いつきり、旅行を楽しもう。くよくよしたつて一緒にじゃないか！ 妻との思い出をいつぱい作るぞ！

「あなた、何、なに。何かおもしろいことでもあったの？」

私が楽しそうな表情をしていたのか、妻が聞いてきた。

「うん。旅行の事、考えたらウキウキしてきたよ！ おおいに楽しもつじやないか」

ロビーからは搭乗を促すアナウンスが流れた。搭乗の順番は一番高い席をとつているものからだ。

私達はファーストクラスに初めて乗る。搭乗券を握り締めて、搭乗ハッチに進んだ。金髪の客室常務員が一列にならんで、たどたどしい日本語で、「ようこそ、ユナイテッド航空へ」と言って頭を下げている。

そして、コックピット正面前のゆつたりとしたソファ式の座席に腰をおろした。

「凄いわね、凄い、凄い」

妻はおおはしゃぎであった。妻の満面の笑みを見て、私は楽しい旅になりそつだと実感した。いや楽しい旅にしようじやないか！

12時間空の旅（1）

私達の乗っている飛行機はボーイング777型機というもので、搭乗人数は550名の大型ジャンボジェット機である。この情報は座席の前にある液晶モニターに書かれていた。なんでもユナイテッド航空の主力航空機のようである。液晶モニターは時々、画面が切り替わり、今見ている画面に世界地図で出ていて、ユナイテッド航空の周航地が地図上に点在しているものだった。流石にアメリカにおいての一大航空会社の一つ世界中あらゆる地域を周航している。私が液晶画面に夢中になつてゐる間に、妻の貴子は、リクライニングシートの位置調整に奮闘している。

「やっぱ、ファーストクラスって凄いよ！ 祐ちゃん」

貴子はシートを最大限、後方にねかせて天井を見ながら言った。
「これだったら、楽だし、長い搭乗時間も苦にならないわ。それにね、このシート、電動マッサージもついてるのよ！」

貴子の少し出始めたお腹周りの脂肪がプルプルゆれていた。

「気持ちいい」 貴子はどこかのCMで聞いたような、素つ頓狂な声をあげている。

「ところで、飛行機に何時間ぐらい乗るの？」

「祐ちゃん、なにい、いまじろ眠たいこといつてるのよ！ 12時

間ぐらいよ」

そうであった。旅行前に貴子がさんざん言つていたような気がする。といつても、私は旅行の事は貴子に任せきりで、ほとんど日程等は知らないでいたのだ。心に余裕がなかつたからだ。で、一体いまから、どこに向かうのだろうか？ わかつてるのはアメリカに行くことだけ。どこに行くのか貴子に聞いてみようかと思うが、また怒られそうだしなあ。でも、確かあ、10年前に行つた新婚旅行の場所に行くといつていたので、きっとハワイに行くのだろうな。そうだ、きっとハワイだ。ハワイに違ひない！

「なあ、貴子。ハワイは1~1月でも暖かいだろ?」

「はあ? ハワイって! 祐ちゃん、夢でも見てるんとじやう?

これから、私達が向かうところはシカゴよ、シ・カ・ゴ。それに、ハワイだったら1~2時間も飛行機に乗らないでしょ? ほんと、祐ちゃんって昨日、私が言つた事、全然聞いてないのね」

「はい、上の空でした。どうもすいません」

私は貴子になじられて、少しムツとしたが、Jijiは素直に謝つておいた。

「ところで、シカゴまでの航空運賃つてこくらぐらいなの?」

「一人、75万よ」

「75万つて、めちゃくちゃ高いじゃないかよ! 乗るだけで新婚旅行の総費用と同じくらいじゃないか」

私は、あまりにも高額料金に声を荒げていた。

「贅沢にいくと言つたでしょう。それには、これでも節約してのよ! JA-Jだとね、130万はするのだからね!」

そうなのか、ファーストクラスつてそんなに高いものだったのか、せいぜいエコノミーの3倍程度の料金だと思つていた考えが浅はかだつた。そりや、シートがイタリア製本皮レザーで電動マッサージ機能が付いてるのも当然のことなんだな。

「それえ、祐ちゃんもお試しあれ」

貴子はシートのボタンを押した。腰部部分が揺れだす。私のお腹の脂肪が揺れる。確かにい

「気持ちいい」である。私も素つ頓狂な声を上げていた。

二人で大笑いした。

「ところで祐ちゃん、さつきから思つてるのだけど、咳でてへんね。今、しんどくないの?」

そういうえば、咳はロビーにいたときから止んでいる。体調もしない。

「うん。今のところ調子いいみたい」

「よかつたわね。もしかして、治つたんぢやう?」

そんな、簡単に治るかボケエ！　と私は思ったが、貴子があまりに真顔で言つてるので、私は可笑しくなつた。

「うん、治つたりなんかして。祐ちゃん、めっちゃ調子いいわ」「でも、よく考えたら、治るわけないわね。『ごめん、ごめん病氣の事思いださせてしまつたわね。忘れてちょうどだい』

貴子は軽い感じでサラッと言つた。私は谷底に落とされたような気分になつたが、これも、貴子流の優しさだと思つことにした。こうやつて、いつも、おちゃらけてるのが貴子なのだから。

突然、ピンと音がなつた。機内放送が流れてきた。

「当機はまもなく、離陸いたします。シートベルトをおしめ下さい」というインストレーションは少し違うものの、流暢な日本語であった。シートの前面に取り付けられている液晶画面もさきほどまでの周航地のマップ画面から切り替わり、シートベルトを締めるよう指示されている。

私達は、程よい位置にシートを合わせると、ベルトを着用した。5分ほどして、ゆっくりと機体が滑走路に向かつて動きだす。

私はあまり飛行機に乗つた事がないので、離陸に対しても不安と興味がいりみだれて、少し複雑な気分。

機体はゆっくりと右に舵をとると滑走路に踊りでた。時刻は午後6時45分、もう、すっかり暗くなつた外の景色は滑走路につけられてる誘導灯がちかちか光を放つていて、実に綺麗であつた。

滑走路に入つた途端、機体はエンジンに火が入つたのか、グォーンという低音を出して、急激に加速を始めた。30秒後にはフワツト浮き上がる感じがして機体は陸地から飛びたつていた。

上空に舞いあがつた機体。機体の小窓からは、雲の切れ間から見える大阪の街の夜景が美しい。

こうして、無事離陸を遂げた、ボーイング777型機はシカゴに向かつて、私という末期肺がん患者を乗せて飛びたつのだつた。

12時間空の旅（2）

機体が離陸してから5分ほどでシートベルト解除の機内放送が流れた。それと同時に液晶パネルの内容も切り替わり、画面内には現在の機体の位置、飛行速度、風向き、シカゴまでの到着予想時間およびシカゴまでの残り距離がマイル表示されている。液晶情報によると、到着までは12時間26分かかるみたいである。飛行機の速度は時速1000キロ出でいて、日本から米国に行く場合は100キロほど速度が上がるのだった。それは追い風に乗るためにあつたのだが、私にとっては、このよつうな重い機体であつても風の影響を受けるのだなあと不思議に思つたりする。貴子にその事を言つと、「そんなの翼があるからぢやない。あたり前でしょ」と軽くあしらわれた。

貴子はくつろぎモードに入つてゐるみたいで、お腹の脂肪がまたしても、プルプルゆれていいる。

さてと、私もくつろいだつかと思つた時、おいしそうな匂いが機内に漂つてきた。そうだ、まもなく機内食の時間なのだ。今、時計は午後7時を少しまわつたところなので、機内食はディナーにあたる。ファーストクラスの機内食つていつたいどんな食事がでるのだろうか？ 実に楽しみである。

貴子の方も匂いを察知したのか、シートの前に置いてあるコナイトツド航空のパンフレットを読み出した。

私も貴子と同じようにパンフレットに目を通す。パンフレットには、「利用出来るサービスと書かれており、私は機内食のページをめくつた。機内食のメニューは2種類あつて、洋食が中心のメインコースと日本人向けに幕の内弁当が選べるみたいだ。私がまじまじと、パンフレットのメニューとにらめっこしていると、貴子が話しかけてきた。

「ねえ、祐ちゃん。どっちにするのよ？ 私はもちろん、メインコ

ースにするけど、祐ちゃんは思い切って、幕の内弁当にしてみたらどう? 「同じ物頼んでも面白くないやん」

私はメニューを見たときから、幕の内弁当つて……という気持ちがあつたので、貴子の奴、とんでもないことに言つてきやがると思った。私は、ここでの選択肢はメインコースに決まつてるだろ? と思つていて。だつて幕の内弁当つて、よく昼飯に仕事場で私が食べてゐる定番メニューじゃないかよ! なんで、ファーストクラスに乗つてまで、定番メニューをティナーに食べないといけないだらう? という気持ちが強かつた。

「貴子の方こそ、弁当にしたらどうなんだよ?」「いやよ、何でコンビニ弁当みたいなもの、ファーストクラスに乗つてまで食べないといけないのよ! 祐ちゃんつて、ほんとアホなんだから……」

やはり、私の妻、貴子は只者ではなかつた。この場においても私を実験体にしようつと思つていたのだ。

そんな機内食選択のやり取りを貴子としているうちに、前列から順番に金髪スッチャー、いや客室乗務員が食事のオーダーを聞きこまわつてる姿が見えた。

前列からスッチャーの声が聞こえてくる。

「May I take your order?」

なぬう~, 注文を英語でとつているではないかあ!

「おい、おい。貴子やばいよお! 注文英語でとつてると!」

「なにい、祐ちゃん、アワアワしてるとのよ! こんな時のために、学校で英語教えてもらつたのよし! なんとかなるわよ」

「それじゃ、貴子お、俺の分の注文も頼むよ!」

私はちなみに、英語は大の苦手である。

「しょうがないわねえ、そんな意氣地の無い事でどうするのよ!」

注文してあげる代わりに、祐ちゃんは幕の内弁当よ!」

「ええ！？ 賴むよ、貴子。俺もメインコースにしてくれえ！」

「バカねえ、冗談よ、冗談。祐ちゃんもメインコースにするから」

ふう〜、私は貴子の洒落にならない冗談にひと安心した。しかし、

私に一つの不安がよぎった。

貴子の奴、英語話せたつけ？ たしか、新婚旅行の時は全くダメだつたはずだ。でも、きっと大丈夫なはずだ。貴子の顔は自信で満ち溢れているではないか！ 早く聞きに来いつて感じの顔じやないか。

「よいよ、スッチャーは一つ前の乗客に注文を聞いている。前席の乗客は私達と同じ日本人であった。

どう受け答えするのか観察してやろう。きっと私と同じで英語など出来る筈は無いだろうと思っていた。

しかし、前の乗客は英会話をしていた。全て英語で注文している。ファーストクラスに乗る乗客は英会話ぐらい出来てあたり前なのだろうか？ しかも、観察しているはずの私は、前の乗客が何をいつてるのかさえわからない。唯一わかったのは Yes と Thank you ぐらいなものである。

そして、スッチャーは私達の席にやってきた。私は緊張して、心臓がドキドキしていた。

「貴子、貴子さん。注文を聞きましたよ」

貴子はプルプルさせているマッサージ機のスイッチを切ると、ゆっくりと電動シートを上昇させた。私は貴子の自信満々の表情と寝ていた体がゆっくりと起き上がるてくる姿に、なんだか頼もしい感じがした。

スッチャーは貴子のシートの横に立つと腰をかがめて笑顔で話しかけてきた。

「Excuse me, May I take your order？」

私は貴子の英会話に期待した。貴子はスッチャーの質問に対して

第一声を発した。

「ハアハーン、ハアハーン！」

「」の一体「ハアハーン」って？ なんだあ？ おやりく、貴子はよく洋画で見るあいづちをうつてこるのだろう。日本語で「う」ところの、「うん、うん」とか「はい、はい」といったところであるつか、しかし、イントネーションが違うような感じがする。

「I, d like to order, please

「ハアハーン、ハアハーン」貴子のあいづちが機内にコダマする。

「ハアハーン

「貴子さん、スッチャーは何を言ひてるの？」

貴子は私の質問に即答した。

「はつきりいって、この人、何言ひてるのかわからんわあそ、そなんあ、わからんつてえ！ やばい、やばすぎる状況。

「どうするんだよ」

「祐ちゃん、あせるなつてえ、」こんな時の為に秘密兵器があるんやあ

秘密兵器ついていつたい何なんだ。

貴子は機内に持ち込んできたポーチを取り出すと、中をまさぐりだした。

スッチャーには「ちょっと、Wait」とスッチャーの顔に手のひらを見せてている。

ポーチの中から出てきたのは、電子手帳であった。

おお、こんなものがあるのだったら、スッチャーが聞きたくなる前に準備しどけよと思ったが、今更どうにもならない。貴子は素早く電子手帳の電源を入れると、電子手帳のメニューから、海外旅行でよく使う場面別英

会話という項目をクリックした。

「祐ちゃん、さつきこの人、何て言つていたの？」

「え、そんな事、覚えてないよ！」

「思い出してよね、出ないと検索できないじゃないの」

スッチャーはそんな私達のやり取りを知つてか知らずか、流暢な日本語で話しかけてきた。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

私達夫婦はお互い顔を見合わせ、声を揃えて「日本語話せるやん」後から思えば、スッチャーが日本語が出来て当然といえば、当然なのである。なにしろ、この飛行機は日米周航便なのだから……。

日本語が出来るのなら、もう遠慮はいらぬ。

「メインコース2つお願いします」

「はい、かしこまりました。お飲みものはどうされますか?」

「飲み物つてどこにメニューあるの?」

「はい、今お持ちのパンフレットの一一番後ろのページに載つております」

私達は早速、ページをめくつた。パンフレットにはファーストクラスでご利用できる飲食物と書かれており、カラーでワインの写真が載つていた。その下にメニューがたくさん書かれている。

飲み物は、アルコール類では、ビール、白ワインの赤ワイン、リキュー、オリジナルカクテルにシャンパン、ワインそれに日本酒、焼酎、ウイスキーにブランデー、スピリットとなんでもござれ状態。ノンアルコールは紅茶に日本茶、コーヒーといったところである。流石ファーストクラス、凄いメニューの数である。新婚旅行で乗った飛行機では、せいぜいビールかコーラーしか飲んだ記憶が無かつた私は感動で目がうるうるした。

貴子はメニューの中からカリフォルニア産白ワインのシャルドネを注文した。私はとりあえず、まずはビールからと思い「バドワイザー」と言つた所、貴子が首を横に振つて、スッチャーに、「日本茶お願いします」と言つていた。

「祐ちゃん、お医者さんが、薬の効きが悪くなるから、アルコールはダメだと言つてるのでしょ。だから、あなたは、お酒はおあづけよ!」

そうであった。アルコールが飲み放題だと思つていたのに、すっかり現実に引き戻された。

仕方がないかあ、少しでも旅行を楽しむ為だ。アルコールは我慢しよう。食事が終わったら薬も飲まないといけないしなあ。私は渋々、貴子の指示に従つた。

「以上でよろしいでしょうか？」

スッチャーは私達の注文したオーダーを繰り返すと、軽くお辞儀をした。

私は知つてゐる唯一の英語Thank youをスッチャーに言つた。貴子は私の英語に対して軽く「ハアハーン」とあいすちをうつた。

12時間空の旅（3）

機内は慌しく、客室乗務員が手際よく機内食を各座席に配り始めた。さきほどまで静かな10席ほどしかないファーストクラスの乗客も機内食が配られるどざわめきだしていた。私達の席にも客室乗務員がメインデッショウが盛られたプラスチックの皿を持ち、シート前面にある収納式テーブルを引っ張りだして料理の盛った皿を笑顔でおいてくれた。高級レストランのフルコースのように一品ずつ料理をもつてきてくれるわけではないが、それでも、料理は素晴らしい内容のものである。料理の横には、お品書きなるもの紙が置かれていて料理の詳しい名前が記載されている。

メインデッショウは舌を噛みそつなネーミングが書かれている。仔羊肉のソテー香草風味と仔羊肉のプロヴァンス風トマトソース和えコンビネーションミックス添えとなっている。貴子はお品書きを見て一言。

「なんのじゅぢや？」

メインデッショウの横にはサラダが上品に盛られている。大海老とトリュフの山海ミックス風サラダ。

貴子はさらりと言。

「なんでも、風つつけたらいいものとかやうでえ！」

確かにメニューのネーミングに関しては貴子の言つ通りのような気がする。ちなみにスープはミネストローネスープである。スープからは美味しいそうな匂いと湯気がたちこめている。

「それじゃ。いたたぎましょうか」

「うん」

私達は手を合わせて合掌のポーズをとると、ビニールの袋に入つたフォークを手に取つた。

さてと、これから頂こうかなあ。そういうえば最近、食欲がわくな

んて無かつたような気がする。

私は、まずスープを口につけた。スープはいつ調理したのだろうと思ひぐらに温かくて、口に入れたとたんマイルドなトマトの味が口いっぱいに広がり食欲をうながしてくれる。次にバスケットに入っているぶどうパンをちぎつて口に入れた。まんべんなくパンに混じっている干しふどうの甘みが良い、ひさびさに食事が美味しいと感じた。貴子の方はラム肉を口に入れていた。貴子はまるで、料理番組のタレントになつたかのように、肉を噛みしめながら、うんうんと首を軽く上下に振つている。

「祐ちゃん。この肉、むちゃくちゃ軟らかくて美味しいわあ、はよお、食べてみい」

私は貴子に促されるように仔羊肉にフォークをさして口に入れた。貴子の言つたように、肉は大変軟らかくて、ラム肉特有の臭みが無く、肉を噛んだとたんに肉汁が口内に広がり美味しい。

「ほんまあ、美味しいなあ！」

「でしょ、でしょ」

パンフレットに書かれている一流シェフが丹精込めて作りあげていますつてのは伊達じやなかつた。

よし、次は山海サラダを食べてみよう。レタスを中心とした野菜の上部には白い粉チーズのようなものがふりかけられていて、中には黒っぽい固形のものが混ざつていた。サラダの周囲には食べやすく、肉を噛んだとたんに肉汁が口内に広がり美味しい。

「ほんまあ、美味しいなあ！」

パンフレットに書かれている一流シェフが丹精込めて作りあげていますつてのは伊達じやなかつた。

よし、次は山海サラダを食べてみよう。レタスを中心とした野菜の上部には白い粉チーズのようなものがふりかけられていて、中には黒っぽい固形のものが混ざつていた。サラダの周囲には食べやすく、肉を噛んだとたんに肉汁が口内に広がり美味しい。

パンフレットの山海サラダ注釈には、最高級黑白トリュフのハーモニーをお楽しみみくださいと書かれている。なるほど、この粉チーズのようなものが白トリュフで黒っぽい固形のものが黒トリュフなんだなあ。うーん。世界三大珍味の一つトリュフって一体どんな味がするのだろうか？ 私は、恥ずかしながらトリュフなるものを食したことことが無かつたので、食に対する探求心が巻き起こりワクワクしていた。でわでわ、白トリュフをいただきますか。

私はレタス」と白トリュフを食べてみた。

白トリュフの味は少しマイルドな酸味があつて上品であった。早速貴子に感想を言つてみた。

「白トリュフ、むちやくちや美味しいなあ。なんて言つかあ、このマイルドな酸味がたまらんわあ」

貴子は少し返答を考えたのか間をあけて言つた。

「ハアハーン、何言つてるの祐ちゃん！ マイルドな酸味つて！ ハアハーン、それはサラダにかかるドレッシングの味よ！ ト リュフってのは、ほとんど無味でせいぜいしてもナッツみたいな味なのよ」

ガーン。そうだったのか、しらんかった。しかし、貴子のやつはどうして？ 私が食べたことが無いトリュフの味を知つているのだろうか不思議である。よし、聞いてみよう。

「なんで？ トリュフの味知つてるんだよう。そんなもの一緒に食べたこととかないだろう！」

貴子は即答であつた。

「ああ、あなたがいなきときに、近所の主婦仲間なんかと、ランチなんかと一緒に行つて食べたことが何度もあるのよ！ ハアハーン」「ガーン、ガーン、ガーンである。私は非常にショックであつた。聞くんじやなかつたとも思う。しかも、ランチだとお、私が少ない小遣いでマイホーム購入のために、昼飯を、今日は牛丼にしようか、100円マックで安くあげようとやりくりしているのに、貴子ときたら……正直頭に入る。さらに、なんだ、このハアハーンと言う、人を小バカにしたような言い草は……それに、俺は外人じゃないし……

「どうしたのよ？ 何り、むくれているのよ」

「別にい、ちょっとと考えごとしてただけだよ」

私はやけになつて大海老だけを残して、一気に白黒トリュフのサラダを平らげた。

それを見て、貴子は言つた。

「もつと、味わつて食べなさい。めつたに祐ちゃんはトリュフなんか食べられないのだから……」

やはり、この女、いや私の妻貴子は口者では無い。私を傷つけたことなど、全く知る良しもないのだった。

しかし、貴子の言動は今に始まつたことじやないし、いちいち気にしていたきりが無いので、私は忘れる事にした。まあ、飯をとりなおして食事を楽しむひじやないか！ その4に続く。

12時間空の旅（4）

私は気を取り直して大海老を一匹口に入れた。

プリプリした海老の食感が口に広がる。実に美味しい。

貴子の方は、客室乗務員に白ワインをプラスチックのグラスに注いでもらっていた。

貴子は、グラスをかつこをつけて少し傾けると、中の褐色の液体をこぼがした。それからワインを少しだけ口に含みクチャクチャと音をたてた。

私は貴子になんで普通に飲まないのか聞いてみた。

「祐ちゃんつて、ほんと、なんにも知らないのねえ！ 真のワイン通は、こうやって最初の一一口でワインの味と香りを楽しむものなのよ！」 ハアハーン

そういうことだったのか、しかし……貴子はいつからワイン通になつたのだろうか？ 普段からワインを飲んでいるのなら分からな氣もするが、私は貴子がビール以外のアルコールを飲んでいるのを見た記憶が無い。さらに、貴子は講釈を続ける。

「このワインは凄く高級なワインなのよ。色が濃いisho。それだけ熟成してゐてことなのよ。それに、香りも、いろいろな匂いが混じつているのよ。レモンの匂いにオレンジの花、ライムの匂いも混じつているわね。やっぱり、ワインはボルドー産に限るわあ！」

「ワインはボルドー産？」 貴子が注文したワインはたしか……カリフォルニア産だったようなあ。いやいや、細かいことはいわないでおこう。せつかく二人とも美味しい料理を堪能しているのだから。

貴子はワインを一気に飲み干した。

「ほんと、ボルドーワインはおいしいわあ！ ぐいぐい飲めちゃう。

祐ちゃんスッチャー呼んで、ワインの御代わりいつてちょうどだい

「そんなの自分で言つてくれよ！ 貴子の方が通路側なんだから、スッチャー呼びやすいだろう。それに、どうやって呼んでいいか、

俺わからないよ」

私はしばしの抵抗を見せたが、無駄のようである。

「祐ちゃんの肘掛に呼び出しボタンあるでしょう。意地悪言つてないで、ボタンを押して呼んでよ！ 今、私は手がふさがっているのよ」

確かに貴子の手はふさがっていた。貴子の左手は私の腹をつまんでいるのだから……

私は腹の痛みから解放されるべく、呼び出しボタンを押した。すぐ客室乗務員がやってくる。

「ワインの御代わりお願ひします」

「さきほどと同じ物でよろしいでしょ？」「

私はわざと言つてやつた。

「はい。カリフォルニア産の白ワイン、シャルドネお願ひします」

貴子の顔を確認した。貴子は「フフウ」と不敵な笑みだけがべついて、何も言わず不気味であった。

「かしこまりました」

客室乗務員が詰め所に戻つていった。

その時であつた……

私の皿の上にあつた大海老5匹のうち、1匹が貴子のフォークによつて突き刺され、私の皿の前を宙にうかんで泳いでいく、とても優雅に時間が止まつたように、そうして貴子のマウスに吸い込まれていった。

「うおおおお

私は叫んでいた。せ、せつかく楽しみに取つていた、大、大海老

が……

「な、何いするんだよお

貴子は満足気に大海老を食している。

「祐ちゃん、何モゴモゴ言つているのよ。海老嫌いだから残していなんでしょう。ハアハーン

私にもはや、貴子に言つ言葉は無い。なぜなら、私は海老は大好物だから、その事は貴子も周知の事実であるからして……

それから、私達夫婦は一時間ほどかけてディナーを楽しんだ。実際には貴子だけ楽しんでいたのかもしれないが、貴子は、その後、何度もカリフォルニア産白ワインを御代わりして、すっかり「機嫌であつた。

ちなみに私の大海老の半数が貴子の胃袋に入つた事はいうまでもない。最後の一匹の大海老が貴子のマウスに入つたあと、貴子は一言、真っ赤になつた顔で言つた。

「ワインの注文の時、意地悪した罰よー」

やはり、そうだったのか！ 全く口は災いの元だと身を呈して実感したひと時であつた。

食事が終わつた後、私は液晶モニターを見た。

もう地図上には日本列島の姿はなく、地図上には、ひたすら青い画面の太平洋が広がるばかりの退屈な画面である。飛行機の速度は相変わらず1000キロを維持していて、シカゴまでの到着時間は残り10時間22分となつていて。ちょうど、関西国際空港を飛び立つてから2時間を経過したところだろうか、まだまだ、シカゴまでの道のりは長い。ほんとに遠い国アメリカ。

私は映画でも観て時間をつぶそうかと考えていた時、貴子が話しかけてきた。

「祐ちゃん。薬、薬飲まないとあかんよ」

そうであった。私は現実に引き戻される。私は健康な体で旅行しているのでは無い。必ず、食後には医者から大量にわたされた薬を飲まないといけない。貴子は呼び出しボタンを押して、客室乗務員に水を頼んでくれた。私は毒蛇のようなイヤラシイ色をしたカプセル二錠を口に入れた。さきほどまでの、楽しい食事と違つて嫌な時間である。続けて、残りの薬も我慢して飲んだ。私の嫌そうな顔を察してか、貴子は優しく言つてくれた。

「祐ちゃん、我慢、我慢。また咳がでたら、苦しいでしょ。楽しい旅行をする為よ、我慢、我慢」
貴子の言つ通りである。あの発作が出たら、ほんと苦しい。全ては楽しい旅行を楽しむためだ。

続く。

12時間空の旅（5）

飛行機は太平洋海上を高度一万メートルを維持して優雅に飛んでいる。もし、機内に天窓があつたなら、きっと満天のプラネタリウムのような星空を眺められるのに違いないと思つ。そんな、少し口マンチックなことを考えていたら、突然激しい睡魔が襲いかかってきた。恐らく食後に飲んだ薬の為であろう。せつかく新作映画を見よつと思っていたが、やはり睡魔には勝てない自分がいる。

貴子の様子を見ると、デザートのハーゲンダッツのアイスを美味しいそうにほおばりながら、音楽でも聴いているのか、簡易式ヘッドホンをして小声で歌詞らしきものを口ずさんでいた。

私はリクライニングシートを最大限に倒すと寝る体勢に入った。

「祐ちゃん、寝るの？」

「うん。薬飲んだら眠くなつたよ」

貴子は備え付けの毛布を体にかけてくれた。

「これも、使うといいよ」

貴子は飛行機に乗る前に、免税店で買った安眠セットなるものをわたしてくれた。

早速、私は安眠セットのアイマスクと耳栓をすると瞼を閉じた。

「おやすみなさい」

貴子が、私のシートの照明を切るスイッチの音が聞こえた。すぐに、脱力感と共に眠気がおどずれる。そして、私はものの5分としないうちに眠りの世界に入った。

私は夢を見た。

夢の中では、今にも壊れそうな木造式のアパートから親子が出てきた。母親は道路に出ると、子供の手をつないで歩き出す。手をひかれている黒いランドセルを背負つた子供は私であった。母さんの

顔は少し強ばつていて、見えてるよつに見える。母さんは私の手を強く握り、ぐいぐいと私を引っ張つて歩いていく。そうだ、この夢は、父さんが肝臓ガンで死んでしまつて、生活のために引越しをして初めて転校先の学校に登校するところじやないか！ 場面が変わって、私と母さんは校長室にいる。母さんは校長先生に何度も頭を下げていた。

「学童保育に入れます。校長先生びつた、この子をよりしくお願ひします」

そうだ、この日から授業が終わると学童保育に預けられたんだ。校長室に若い女の人人が入ってきた。

「祐介君の担任になる星野先生です」

校長先生は女人の人を母さんに紹介した。

そうだ、そうだ、星野先生だ。夢の中で記憶が蘇る。いつも、優しく、私の面倒をよく見ててくれた美人の星野先生。

クラスのみんなが、私に注目している。教壇の前に立つてる私……なんだか、とても恥ずかしい。

「転校生の三浦祐介君です。みんな、仲良くしてあげてよ」

星野先生がクラスメートに紹介してくれている。

「みんな、返事……」

「はーい。先生」

でも、クラスメートの返事は嘘だつたんだ。転校してからしばらくなの一間、みんなにいじめられたんだ。

体育の授業だらうか？ ドッジボールをクラスメートとしている私。相手側にボールが渡ると、みんなは私の顔面めがけてボールをなげてくる。私は必死に逃げ回る。でも、無情にもボールは私の顔を捉えている。

勢いよく後方に倒れこむ自分の姿が見える。みんながケラケラ笑っていた。

たつた一人の女の子を除いては……

「ええ加減にしどきやあ。祐介君かわいそうやわ」

おさげ頭にクリクリした目をしたその女の子は、少し怖い顔をしてクラスメートに意見した。

私にとつては、見覚えのある顔。みんなに意見してくれた女の子は、私の妻……貴子であった。

「転校生いじめて、何がおもしろいねん。祐介君も負けてたらあかんでえ、やられたらやり返すんやあ」

確かに貴子の言う通りだと思うのだが、貴子はクラスメートに比べて一回りぐらい体が大きい。体格がいいのだ。それに比べて、私は瘦せていて貧弱に見える。貴子が大根だったら、私はもやしみたいなのである。

それゆえに、クラスメートにいじめられていたのじやないかと思つてゐる。

ボールが当てられたので外にでた私に、ボールがバスされた。さつき私にボールをあてた奴にリベンジするチャンスがおとずれた。私はクラスメートの一人に照準を合わせてボールをふりかぶつた。そして投げようとした時、大地が揺れた。地震かと思った時、夢から覚めた。

目覚めると、機内放送でシートベルトを締めてください」とアナウンスされていた。どうやら、夢の中で地震だと思ったのは、飛行機が乱気流にもまれて少し揺れただけのようである。しかしながら、少々夢の続きが気になる。そのあと、どうなったのだろうか？ クラスマートにボールを当てる事ができたのだろうか？ うーん思い出せない。ただ、わかっている事は、あの日のドッヂボールをきっかけに、貴子に知り合う事になったのと、クラスのみんなとそれ以降、急激にうちとけあう事ができたということだった。貴子に助けられたのだった。

「祐ちゃん。起きたんかあ」

「うん」「

「せつめの揺れで田覚めたんやなあ。なんか、うなされていたみたいやけど、怖い夢でも見たんか？」

「怖い夢とひやうけど、懐かしい小学校時代の夢みてたんや」

「そりかあ、小学校時代の夢か、私、夢の中でてきたの？」

「うん。でてきたよ」

「可愛かったやろ」

「うんうん。頼もしかったよ」

「頼もしかったあ？ いつたいどんな夢みてんねん」

「まあ、ええやん。ところで、貴子はなんで田に涙つかべてんの？」

貴子の田は涙田になっていた。

「そやそや、祐ちゃん寝てる間、映画みてたんよ」

「何の映画観てたの？」

「ハリポタの不死鳥の騎士団」

「感動して泣いてるの？」

「違つよ。ロンがあまりにも、不細工な顔になつていて、おもしろすきで涙がでてきたの！ 子役の時はおほこい顔してたのに

よくもあそこまで変貌したものやわあ

どりやら、聞いた私がバカだったようだ。とりあえず、ハリポタのロンさんよ、じめんなさい。

こんな妻を許してやつてください。

「見て見て！ 祐ちゃん。ほんま、ロンの顔おもろいなあ

貴子はそう言って、液晶の画面に写しだされた正在のロンの顔を指差して笑っていた。

ビーフのハンバーガーが、私の心はダメだっこやである。

12時間空の旅（6）

あいかわらず、私のシートの液晶画面は青一色の太平洋と縦に一本、日付変更線が表示されているだけの退屈なものである。シカゴの空港までの距離は8000キロをきつたぐらいの位置表示。ということは、私は3時間弱ほど寝ていたことになるのかな？とにかく、あと8時間ちょっとでシカゴにはつくみたいである。貴子は口の事をバカにしながらもハリポタを夢中で見ている。私はさつきの夢のせいか、映画を観る気にならなかつたので、貴子が持つていて電子辞書をいじつてみることにした。とりあえず、今から行くシカゴつと。電子辞書によると、シカゴはアメリカで三番目の都市のようだ。イリノイ州にあってミシガン湖のほとりにある街。農業も工業も発達していて、アメリカにおいて水陸交通の要のよつなどころ、日本でいつたら名古屋つてところなのだろうか？

ご丁寧にも漢字で書くと「市俄古」になると電子辞書は教えてくれた。結構、電子辞書つて便利なものだなあ。私がシカゴにもつているイメージはピザなのであるが、そんなことは全くもつて書かれていない。

「ああ、面白かった。祐ちゃん、何してるの？」

どうやら、貴子が観ていたハリポタが終わつたみたいであった。「うん、今から行くシカゴをちょっと調べていたのさ、ところでシカゴのどこ観光するの？ 行くとこ辞書で事前に調べてみるよー。」「ハアハーン？」

私は嫌な予感がした。それと、この貴子の「ハアハーン」は、字幕で映画を観た影響であろうか、さきほどまでのイントネーションと違い、よりやばい方向に向かつているように思える。そして、予感は見事なまでに的中した。

「シカゴで観光なんかせえへんでえ。あそこは飛行機乗り換えるだけよ」

私のほうこそ「H A H A - N？」である。飛行機乗り変えるつて、いつたいどこに連れていくるのだよ貴子さんよお？ まさかアラスカ行くとか言つんじやないだろうな！ 私はビビリながら聞いてみた。「で……どこを目指すの？」

「花の都ニコニミークよ」

花の都って、違うだろうよ、貴子さん。

「ニコニミークに行くのかあ？ だつたら乗り換えなんて手間かけないで 直行便でいいかないの？」

「予約がとれへんかったのよ。急に決まった旅行だから仕方ないでしぇう。なんかあ文句あるん？」

そうだったのか！ どうりで……あのお喋りな貴子がシカゴの話題をしてこなかつたわけだ。

「祐ちゃん。そんなことより、シカゴで入国審査あるのだから、このガイドブック見て練習しといてよね」

「入国審査つて簡単だらう！ 新婚旅行でハワイ行つたときなんて、ほとんどスルー状態じやなかつたけえ？」

「祐ちゃん、ハワイが特別なだけなのよ！ アメリカ本土はハワイみたいにアロハでスルー出来るような甘い入国審査じやないみたいよ。ましてや、9・11のテロ以降、入国に関してはピリピリしてゐるやうなのよ」

そつなのがな？ 私は半身半疑で貴子の話に耳をかたむけた。まあ、用意周到にこした事は無い。

私は貴子から旅行に関するガイドブックの本を受け取ると、早速、入国手続きのページをめくつた。

本によると、入国審査とは最初に着いた空港で行つとなつてゐる。そのことを利用して審査の厳しい本土で審査をせずに、審査の比較的緩い、グアムやハワイでいつたん乗り継ぎして、その際に入国審査を済ましてしまう日本人もいると書かれている。なるほど、まさか貴子の言つてることもあたつてゐるのかもなあ。

まず機内で出入国カードを記入するとなつてこる。これは、新婚旅行の時に一度書いたことがあるから問題無しだら。空港についてから審査官に帰りの航空券と関税申告書を提示することになるので、事前に用意しておくこと。提示したら、簡単な質問がされるので、この問答集をみてはつきりとした英語で答えられるようにしておこうと書かれている。もはや、アロハだけでは到底無理なんだな。本には、アジアで唯一のビザ免除プログラムが適用されているので、まだ、中国や韓国の人々に比べたら楽なので、臆することのないようだと【】で注釈されている。それと、2004年9月30日以降、指紋の採取とデジタルカメラでの人物撮影がビザ免除者でも義務化されていると書かれている。

私は問答集に書かれている審査官との会話例に目を通した。そんなに難しいことは聞いてこないみたいなので安心した。

What is the purpose of your visit? (旅行の目的は何ですか?)

I'd like to travel for sightseeing (観光です) と
答える。

How long are you staying (どのくらい滞在しますか?)

「うーん? 旅行はどういうふうにするのだらうか? 貴子に聞いてみた。

「何泊するの?」の旅行は?

「あなたの体調次第よ」

そんな回答を聞きたいのじゃないって、貴子ちゃんよおー。そんなんじや、審査官に別室連行されるだらう。

「真面目に答えてくれよ」

「何怖い顔してるのよ、旅行行く前に言つたでしょ!。聞いてない祐ちゃんが悪いのじゃないのよー。それに

実際問題、祐ちゃんの体調次第つても本当のことじゃないのよー。」

貴子は少し顔を膨らませて、早口で言つた。やばい、やばい。貴

子のヒスが出たらややこしい事になるからなあ。」（めー）は一つ自重して素直に謝つておくのが得策だ。君子危つきに近寄らす。

「「じめん、じめん。そんなつもりでいたんじゃないのだよ」

「じゃ、どんなつもりで言ったのよ」

「そう、イジメないでよ。貴ちゃん。おじで何日滞在するの?」

「一ヶ月よ」

一ヶ月も旅行するのかよ。正直、体が持つのがどうか不安である。「なんかあ、言つたあ？」

「嬉しいなあ、一ヶ月も旅行できるのかあ。めりやへりや、俺嬉しいよー。」「さうでしょ、こんなとこ行くんだから

どうやら、危機的状況は回避できたみたいで、貴子の「機嫌は直つた。」
と云う事は、「Once more」（一ヶ月です）でいいのだ

な。

What is your occupation?（あなたの職業は何ですか?）

うん？ 銀行員つて英語で何て言つたのだろう？ 辞書で調べてみよ。そっか、Bank clerkつていつのか、なんだか、かつこいいじゃないか！ I am a bank clerk
（銀行員です）

私は、その他2・3の質問の練習をした。よし、なんとかなるだるづ。

この時までは、入国審査を楽観視していたのだが……

つづく。

12時間空の旅（7）

私が入国審査の練習をしてくるついで、どちら飛行機は日付変更線をまたいだようであった。もう何度も見て、見慣れてしまつた液晶画面には太平洋と、ポツンと画面の左隅に小さくハワイ島の地図がのつていた。

まてよお、と……やつことは、ここから時差が発生していくことになるのだ。たしかあ、ものの本に西から東に行く場合は一日時間が戻るつてことだったような気がする。いずれにしろ、今していれる腕時計の時刻は現地に行つたとき役にたたないつてことだな。現地に着いたら、まず時間合わせしないといけない。しかし、時差つて不思議で頭が混乱してくる。着く前から時差ボケになつたような気がする。隣で相変わらず、音楽をさせそうに聴いている貴子には、時差ボケなんて、およそノープロブレムなのだろうなあ。そのような、どうでもいいことを考えていたら、客室乗務員が夜食の注文をとつて、各シートをまわつていた。

「きつねづんーーおねがい」

貴子は金髪スッチャーに臆することなく、まるで近所の大衆食堂に注文するような感じで言つてのけた。

でも、きつねづんって、そんなものメニューにあるのか？ まあ、あるから貴子は注文しているのだろうけど、夜食のメニューまで事前にチックしているとは流石だと思つた。

「お客様はどういたしましようか？」スッチャーは私に聞いてきた。私は貴子にメニューを見せてもらおうとした時に、「チーズの盛り合わせお願ひします」と、貴子の口が動いた。

スッチャーは私達に軽く会釈をすると、詰め所に戻つていった。

「何い、勝手に注文するんだよ！」

「だつて、同じもの注文したつて面白くないやん。そつやう、こい

のチーズは美味しいとむちやくちや 評判なのよ

「だつたら自分がチーズ注文したらいじやないかよ」

私は少しふくれて文句を言つたが、貴子は全くの無視で軽くスル

一されてしまった。

ほどのくして、私達の座席にきつねうどんとチーズの盛り合わせが運ばれてきた。その際に貴子はバドワイザーを注文していた。…つたく私のチーズをあてにして飲む気満々じゃないか！

貴子はきつねうどんをすすりだした。なんとも、うますぎに食べている。私もどんな味なのか？ 食べたい。

「ちょっと、俺にもくれよ！」

「もう、ちょっと、今食べてるのだから 待つてよね」

貴子はもぐもぐ口を動かしながら、食事を邪魔されて目が怒つてゐるよつに思えた。

「はい、どうぞ！」

半分以上食べられてからきつねうどんのカップが、私のテーブルに置かれた。

私は、箸を手にとりきつねうどんをする事にした。まさかあ、高度一万メートル上空できつねうどんを食べるなんて思つていなかつただけに嬉しい気分だ。

麵を一口食べた時だつた。突然、胃がムカムカしてきた。なんだか、吐き気がする。私は持つていていた箸をテーブルに置いた。

「祐ちゃん、どうしたん？ うどんマズイかった？」

私の食べる姿を見ていた貴子が聞いてきた。

「違うよ。また始まつたみたいだよ」

そうなのである。私が肺がんになつてからの自覚症状の一つ、吐くという症状が出たのだ。食後、いつもなるわけではないが、時々起ころる。

「ちょっと、トライして吐いてくるわ

私はゆつくりと座席を立つと、フラフラしながら機内通路をトイ

レに向かつて進んだ。

「一つあるトイレは幸いにも両方空いていた。すぐにトイレの中に入った。

私はトイレの中で思いつきり吐いた。苦しくて、苦しくて、涙が出る。さつき食べたものが、全部胃からリバースされる。悲しくて、悲しくて、涙が出る。くそお、せつかくの思い出の食事だったのに

……

トイレのドアがノックされた。

「祐ちゃん、大丈夫？ ちょっとドア開けてえ」

私はドアの鍵を開けた。ドア越しに貴子が背中をさすってくれた。「大丈夫、大丈夫。すぐに良くなる、良くなる」そう言つて、貴子は背中を上下に優しくさすってくれた。

貴子の優しさに、また涙が出てきた。しかし……苦しい、吐いても、吐いても、ムカムカする。

30分ほど、吐き気でもがき苦しんだ私だが、吐くものが無くなつたのか、よつやく吐き気がおさまつた。貴子はその間、ずっと背中をさすってくれていた。

「ありがとう、吐き気がおさまつたみたいだよ」

「よかつた、よかつた」貴子も涙を浮かべていた。

トイレから出ると、密室乗務員と初老のスースを着た男性が立っていた。

「お客様、今氣分でもお悪いでしょうか？」密室乗務員が聞いてきた。

「ちよつと、急に吐き気がしたものでして 吐いておむけついたみたいなので大丈夫だと思います」

恐らく、乗客の誰かが、私達夫婦のただならぬ様子を心配して乗務員に連絡でもしてくれたのだろう。

「顔色がお悪いようなので、少し診てさしあげましょ」

私と乗務員のやり取りを聞いていた初老の男性が声をかけてきた。

「申し遅れました。私、高須つていいます。こちおつ職業は医者をやつております」

「いやあ、ほんと もつ大丈夫ですか?……」

「遠慮はよくないですよー。さあさあ、座席に戻つてください。少し診てあげますよ」

「そうですか、どうも高須先生申し訳ありません」

人の親切心をむげに断ることもあれなので、私は高須なる先生に診てもらつことにした。

12時間空の旅（8）

高須先生なる医者も、どうやら私達と同じファーストクラスの搭乗者のようだ。診察の支度をしに、先に自分のシートに戻つていかれた。

「どうするよ、貴子？ 正直に話したほうがいいかな？」

私は、肺ガンである事を高須先生なる御仁に話したほうがいいか迷つていた。私の質問に対しても貴子は何か作戦を練つているのだろうか？ 私とは目線をあわせず、どこか他のところに目をやつてる感じだった。

「聞いてるの？ 人の話」

「ああ！ あああ！！ やっぱり、そうだわあ」

貴子は突然、驚いた表情で言った。何がやっぱりなのだから、私は見当がつかないわけなのだが……

「どうしたんだよ、何か思いついたの？」

「うん、あの高須つて先生、どうかで見たことあると思つていたのよ。ほら、CMでお馴染みのYES 高須クリの人じやない」
なんなんだ、YES 高須つて？ もしかして美容整形のCMのことを使つているのだろうか、それに、私が聞きたいのは、高須先生に肺がんである事を打ち明けたほうがいいか、どうかを相談しうとしてるのに。

「よし、思い切つて聞いてみよう」

貴子は、私の相談事など眼中になく、頭の中はヒロミ 郷のCMのフレーズでいっぱいのようだった。

とりあえず、私は診察されている時の状態を見てから打ちあけるかどうか、様子を見ることにした。

シートに戻つた私達は、高須先生がこられるのを待つた。
ほどなくして、高須先生が診察道具を持って私達のシートにやつ

て来た。

「お待たせいたしました」

高須先生は私の座席の横で中腰になつてくださつて問診を開始された。

「それじゃ、口を大きく開けてもらいますか」

私はあーんと口を開けた。

高須先生は片手でペンライトを当てて、口内の様子を確認された。

少しの沈黙の後、高須先生は言られた。

「ただの風邪ですね！ 扁桃腺が少し腫れている程度ですよ。一応胸も開けてもらいますか」

私はシャツのボタンをあけながら思つた。ただの風邪のわけないだろう！ キッと胸を聴診器で見てもうつたら、わかるに決まる。私が肺がんであることが……

私は見てくれといわんばかりに、シャツの下の下着を上にまくり上げた。

高須先生は聴診器を胸に当てる。

「はい、大きく息を吸つて、吐いて。次、背中見ますね」

私は高須先生に背を向けた。

高須先生は胸を見たときと同じように背中に聴診器を当てる。背中に金属特有の冷たさを感じた。

「うん、異常ないですよ」

私は、耳を疑つた。そして、隣で心配そうに見ていた貴子に田でどうしたらいいか？ 合図を送つた。

貴子は、私の視線をそらして、高須先生にお礼の言葉を言った。

「どうも、先生。ありがとうございました。ただの風邪だと先生に言つてもらえて、とても安心できましたわ。主人には、安静にして早く風邪治してもらいますわ。でないと旅行が楽しめないですもの」

貴子はぬけぬけと、高須先生にそう言つと愛想笑いを先生に見せた。

「風邪を治すのには、充分な睡眠と水分補給が肝要ですよ。それじ

や、お大事に」

私と貴子は再度、高須先生にお礼を言つと、先生は自分の席に戻つていかれた。

貴子は高須先生が席に戻られたのを確認すると、待つてましたとばかりに話だした。

「祐ちゃん、ただの風邪だつて。よかつたじゃないの」

「良いわけないだろう、ホントの事言つた方がいいのに決まつてゐじゃないかよ」

私は、高須先生に診察結果を聞いた時に、貴子にスルーされたことを根に持つていたので少し怒り気味になつていて。

「なんで、田で合図したのに無視するんだよ」

「何怒つてるのよ。正直に話して、もし飛行機が急病患者のためだと言つて、目的地に着く前に着陸とかしたらどうするのよ。祐ちゃんは、今現在、私に文句言えるぐらい元気なのだから、それでいいじゃないのよ」

貴子は、全く反省する」となく、ズケズケと言いたい事を言つてくる。こつゆうのを逆ギレつていうのだと私はしみじみと思つた。「とにかく、先生も安静にしなさいって言つていたのだから、文句言つてないで、少し横になつて寝たらどうなの」

貴子の言つことも一理あるのだけど、なんだか寝れそうな気分ではなかつた。

のどが乾いたので、スッチャーにウーロン茶を頼んだ。

あと、どれくらいで、シカゴにつくのだろうか、モニターを確認してみる。

シカゴまでの到着予想時間は四時間二十分となつていて。距離にして、あと四千一百キロ。

機内の外が明るくなつてきたので、機窓のカーテンを少しづらして機外を見てみた。

飛行機は海上ではなく、こつまにか陸を飛んでいる。つてこと

は、アメリカ大陸にはいったて事だ。

モニターの地図を確認してみると、アメリカ西海岸上空を飛んでるようだ。地図の斜め下にはロサンゼルスと英文字で書かれていた。私は、いよいよアメリカだと思う期待と、病気の事が気になる不安が心の中で押し合いでし合いしてゐるような複雑な気持ちであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023d/>

アゲイン

2010年10月11日18時38分発行